

# 海紅句録

一碧樓選

〇〇隊 本間 昇

熱風日々これに備砲あり空白し  
夏夜陣地選定であるくらきにうごき  
河の水細く流れうつくしく棗實の青く  
月明ありよくのびぬ棉に棉島に伏しをる

諏訪 矢崎 博敏

田の水をいれる畦豆犬きい  
管制下音して桑の葉に動く蠶  
あつさ地に残り日暮れし芋島  
兵となるいま麥畑にわく夏雲

沼津 伊藤 彌太

山あり早苗田あり故里みな決戦す  
戦刻々豆の葉あをくしげる  
散策する我をうつたうもろこしの葉  
來ん秋の親しさ思ふわが繪の黒さ

立川 守矢 日出男

草の穂青しわれら戦塵にあり  
戦意地に満つ夏草の揺れやまず  
青葉の照りを感じる部屋に機械を据ゑる  
蟬の聲する地の凹みの穂草風あり

東京 滑川 三千夫

馬鈴薯の花芯黄にして朝にして

父親母親にも眼に殘照の桐の花  
はこべ莖長く連なり引かれて白い根  
夏日某日友は瘦身を草に起して應へ

新潟 三雲 城東

道埃くる風向き木綿の種子を蒔く  
茄子苗をもらふ妻が朝のぬれし手にて  
投網打てば水から風吹きて芹の花  
青い山見えて身近くゆれる菜の花

宮城 森 庄作

板の間に坐りこゝろ桐の花きき  
青々山へ來し牝牛にある遠景  
麥野が大きくうれる朝霧の太陽  
子ら遊ぶ土のいきりじゃがの花さく

名古屋 平井 青五

松の花のなか松山下りてくる顔見えて  
梅若葉し露もかさなりて茂り  
どこも家が低いどこも無花果の若葉  
工場板壁に陽あたりし麥が豊熟

仙臺 日下 泰山樓

醫道たふとくお召あり栗の花今をさかりて  
矢車草花さき防空壕一方に道あり  
雲かげ動くに一機二機飛ぶ花灰白し  
一兵としてお召あり炎天ねむの花

佐渡 金子 壁人

トマト大きく植はり我暮らしの薪をつくり  
夏潮打ちつけて來る片口の水のむ

栗の皮むく夜深くして坂の上にある家  
打ち込む鉄先石にあたり土深ければ

室蘭 伊藤二一郎

豌豆の實入り潮の動く朝の海

船が揺れる積込する人夫たち暗きに汗し

水鳥幾羽か入り交り祭の幟たてり

船に積荷すみし海面夏の雲出で

香川 新田 巢州

黄昏百舌鳥なく池の邊をその方へ歩いて

かに赤きはさみを立てからつゆ日々

土の手ざはり喜びいもさすに雨後の山々

雀ものをついばみて苗代の香り

岡山 岡本 草二

壕の深さあり向日葵こちらむいてゐる

鉄打ちひびきつづく濱に咲く野人參

夜の街をはなれてくる田の田の水あかり

石川 松原 颯々

七夕笹たてゝからけふはお宮で遊ぶ

浅瀬舟もう晝のさよなみにて親子

あるじの出穂揃ふ畔もうつくしい黍

山形 澤渡 尙之

卓上の紫陽花淡水色で匂はぬ花

紫陽花淡水色でまんまろく握りしめたい

青空と雲とはつきり別れ涼風吹いて

東京 米田 喜雨

瓜見事なる空地の永き一日

風白く吹く冬田日々近づきがたく  
しんから山々が冷えてくる黙つて急ぐ

青森 井上 星樹

笹山崩えんとし放牧馬の背光るなり

少女達のこゑする玫瑰さく丘をゆきつ

わづか雪残る笹山の笹噛みて放し馬

宮城療 日下 丑松

癒えるを信じ眞夜中閑古鳥鳴く

療友の心犬つゝじの花大きい

湖面すれくくに燕水にあたることあり

岡山 仙田 黄葛

麥穂を出したのと葉ばかりのと山が遠い

眞上から日が照り除蟲菊咲いて島の畑

冷く日照りこの畑の南瓜固いと思ふ

香川 中野 健三

トラツクからおとすドラムころがすにみんなが裸

友來れば友に話あるいづ方もひでり夏の日

青い林檎子らとかむ林檎すつぱく

東京 下平 天耳

朝釣するお濠端草の穂かげ竿のかけ

夏河鐵橋より低くとぶ鴉ありて朝

芦むらに波面につゆの雨降り放水路廣幅

諏訪 中村 常男

征くに牛の事ばかりいふ麥秋の土間

軒の茅厚いそこに雷雲うごく

つばめ裸子落ちし土間小さき草生え

新潟 小川 光明樹

工場の騒音のなか萎ばら垣の赤い花

川水のにごり雨霽れし馬鈴薯の花

房々桐の實生りしあしたにて薪を割る

富山 中川 尙三

草を刈る 薊が咲く 野の朝

夏帯の者もう見えなない青田の徑

戦場へつゞく地に伏して田草を取る

青島 瓜生 敏一

海のおかるさこの端へ養鶏のことで訪ねる

紺青のうしほ葵は莖高くのぼりある

熟れた杏が市に出る頃となつた日中を通る

宮城療 齋 藤 達也

日覆して誰かゝる静臥室沈丁花咲き

麥の穂が白衣に匂ふ丘に一休みする

彈着遠のいて知る 朴の花 白い

宮城療 土屋 國男

夕べ雲残る窓に熟麥が迫りくる

待避壕陽に翳り草の花 白くあり

多くを言はず春大根を下げて來し男

東京 金内 錫四

春日の土手に土手の長さに天あり

桐の花 咲く朝屋根屋根かたち据わり

青葉に風あり茂りの事の人へ近づく

〇〇隊 大淵 青柴

強行來し山道盡くるところ 朴の花

部隊ひたゆく道の山吹の花踏んでしまふ  
兵舎まはりのアカシヤの匂ひ目さむる

横濱 中上 徳義

今朝雨降りつばめがゐらない軒の巢

突然蟬鳴いて眞晝のわが家近く

炎天勤勞學徒たれもがその學帽を戴き

岡山 二宮 秋歌樓

春ゆふべ廣い積にて少し冷えて

柿の若葉に遠く白雲動かない

立つに足もとの豌豆の花 白い

宮城療 村上 幸吉

菖蒲花 咲きいま憶ふ父の顔

仔馬にたてがみあり青草を駈けるに

わが闘病地に蔓草蔓を伸し

長岡 藤田 三六亭

子等の噛む胡瓜われもして見る

夏日鐵削るをみな切粉をかむり

夏の朝の體操する峰おろしの風

秋田 高橋 安榮

風 青草を吹く水鳥水にあり

梅雨 空を窺をあげる

から梅雨を山羊鳴ける草中

備前 二宮 香芽子

ゆすら籠に盛られ二三枚のみどり葉

いくにち雨なくて庭にきいす鳴きて

枇杷の盆をかこみ枇杷をいたゞく父と子等と

東京 坂岸 桂保

巖まで泳がむとする兒等の眼ざし

決戦最中今朝屋根霜零清澄  
勤續この路の今朝或る家の橙實り

信濃 中村 仁

ぐみ熱む土手の穂草しばしそよげり  
しみじみ兵の心をかんに胡桃の青い實の下  
かつこう鳴きまつすぐにねてゐる子供

秋田 佐藤 西呂

馬も馬も夏夕べの水へ草へ

野薔薇をもつ心はつきりあさの心  
松林くろい夏夕のそらおほきい

佐渡 瀧浪 龍雄

晴澄みて鰯濱上げし數々

海燕が巢をくふに白い島に日が落ちる  
岩が一つづつ形をなし夏の海を舟漕ぐ

備前 仁科 孝子

庭にぐみの花さいてその邊の草々

女が出て来て家前のうす霜  
早春霰の音を聞いて友と居る部屋

青森 工藤 折葉

炎天戦ひを思ひ行くにゆきずりの人の言葉も  
みいくさ舌に於て子規書簡集を讀む夏夜

佐渡 丸岡 岳人

綿の廣い葉に水氣あり曇りの空  
蟬の聲する或朝施肥に

東京 佐藤かめ雄

月夜の監視のわが影をふみて

盃ふせて月に征く人と肩をならべた  
會津 渡部 東迷路

葛棚の下に陽を浴び菜園見えて

胡瓜畑あり一方松葉牡丹が咲きし  
神戸 姫田 輝房

唐萱のみどりを噛みふいと思ひ出づるあり

防人といふ汗して潮風に吹かれ  
東京 松本 薫

木の茂り彈藥庫の歩哨歩むが見える

灯取蟲舞ふ灯の下に枕を寄せことも  
宮城療 小野 寺信夫

ことしの薔薇にふるさとの山々とありて

田植終つた田園風景列車ひるごころ  
八王子 小坂 眞二

警報解除の道を月にゆく浴後

蟲の鳴きやまず退避訓練の工場  
秋田 武藤 北火

大樹二三本祈願の人あり夏日かげあり

工場からも見ゆる青萱の風  
三條市 梅澤 苔水

水邊遠く夏の日夕暮れて小波

夏の日太陽照らずある葉蟲  
備前 桂 四郎

燕入り来る窓より海廣く

梅雨雲大きく蘭の新芽の揃ふ

八王子 詩陣寺創平

てふてふが寛を越えとんでゐる

水馬の波紋に昏くなる田舎

立川 小川 夕舟

汗滲んだ書類事務室の窓の夕焼

蠅啼いてゐる花火買って子供へ歸る

越後 田部 直枝

梨の花咲いてゐる妻は柴木抱へて通り

桶や簀の子のかたち浴槽に菖蒲を入れん朝

玉野市 安藤 秀男

日盛の兎小屋のうさぎを見るしばし

満洲 佐藤 弘

一部屋の殊に明るき山つゝじ

備中 浪井 隆之

蟬のこゑす青き山々の明るさ

陸病院 宮平 千市

雲雀とびたつなど麥を刈る音

東京 宮田 御箭

宿舎の外桐の木の花咲き霽れし

津山市 杉山まさし

五月雨に網を打つ小舟流れつゝ

○○隊 山下まこと

美しく大根の花咲きし手向ける

東京 上木 彙葉

子供はだして来る家のぐるり草青し

### 海紅近作鈔

諏訪 山田 蒲公英

近い山いろくにあをし遠くひといろの山

男胸をひろげ胸へ麥熟れる風

郭公鳥人に鳴くごとく人に青い山

大前しづかに蟬が鳴く征く人と立つ

君征つ麥をこなす音をうしろに

京都 川島 南海城

雨降りわれら馬を愛す芋の青い葉

我等に水に音あり山に這入つた樵人が冷える

家鴨に家鴨の水あり松の幹あり草原明ける

畑に青空あり婦人國を愛す心の麥の穂

家の木茂り人に子があつて朝山を拜む

秋田 三國 屋白省

空が冷えてきて畑のゑんどうに在り

松露はまつのしたに青い海をまへにす

梨になつた梨袋かけてくる

空がつゆぞらのまゝ夜になりきつてしまふ

鳥まんなかがあつてまんなかのゑんどう

諏訪 守矢 自由也

夏めく鳥のこゑして家人健在

よろこびあり麥畑芋畠の夜明けし

警報つゞく夜を出でて田に水注ぐ男

晨に晝に匂ふ一室の小品山百合の花  
野あをく海のごとく揺れてゐる野芒

〇〇隊 富岡のぼる

鐵條網のうち居り春の夜全く明けし  
おろかしく蛙とぶ草中ふかく日差し  
城門こゝにあり彈痕かくあるを春日  
戦跡山野春の日の鳥低くとべり  
大軍 齧ける野の 薊草の花

東京 星野 武夫

夕明りさし一汁一菜の小さい器にありて露  
雨雲に道がつゞき白いつゞじの花  
此頃大きい旋盤を操作するあさ道の柿の花をふみ  
しつとりしてゐる甘藍菜もらつてきた家に夕日さし  
夜空 爆音し 筍立つ地に立ち

東京 山崎多加士

鳥さけぶ夏の日を河原の石採り舟  
くちぼそと言ふのを二ひき釣つた河のながれの夏  
この夜無言の聲迫る茂りの木立てり  
敵戦車へ躍り込む一念さつきから蟬鳴く  
夏朝わが顔を鏡に見る我が鬪魂

秋田 杉村木々人

桃花 梨花 人はその邊を耕し  
遠雷 なれ生葱をかじるに  
いづ方も夏雲の立つを崩るゝを一日  
どこかで歛の音すどこかでてろろ鳥啼いて  
薄暑 榎一樹のいろにつゞく遠山

備中 瀬尾一風子

坂みちをすとすと下りる田植へ行きます  
山のはたけのやせ土の甘藷の蔓の  
うちにも水をやらうはたけの夏葱  
畦みちのしめりをゆく畦豆が左右からしげり  
畦豆 畦にしげり父も母も元氣です

大分 田邊 慶風

麥刈り進むにありて夕方の阿蘇の山  
大きな湯呑にぶらぶらが響きくるが夏朝  
雨乞ひがあつまりし草踏みつけたり  
水いたづら叱らずに着せる物からくする  
朝の巢にをりてつばめの子見えて

尼崎 林 さあを

生きてかまきりの子とぶ草の濡れ葉を  
水掬ひてのむ崖に たれ炭の青實  
曇りて鳴くくさのなかつめしろいむね  
工員たがねをもちぬれて花をへたはこべ  
麥束はこびゆふべうすきあかり家まはり

秋田 足遠 矩水

その方に待避壕すこし浅く李いよ落ちる  
校庭 馬鈴薯花咲くはだか體操をする  
一機二機警戒低しと見る麥畑刈られたり  
蔓もの花咲くへ埃りし擬裝一隊  
一人征き二人征き 蔓さげに手をかたく立てる

名古屋 加々美 絹子

人とはたらくよるこびりつぎの花白

私らに木槿の花白い木の下音もない  
子をまもる母にかたばみは小さき花咲く  
子供の裸身うれし十薬がしげつて  
せみなきしきる子の顔ちかく青葉ぎつしり

諏訪 山田不雪郎

そこに火叩きがあり桃の枝花つけてゆれる  
木の芽葉になる山の堰長く水曳いてくる  
木が青葉牛飼ひたくてゐる牛を見る  
水に午すぎし日射し竹の皮ちる  
大農の構へ眞夏にして庇のかたち

濱松 口田朴也

日ののぼる藪からたげのこ掘りて男  
馬鈴薯の僅かな花崖下に住む  
青桐は棒のやう葉があり少年兵を送る  
杉葉青みてある蚊遣の一夜  
蚊帳を黒く思へり梅雨なり明け方を眠る

小田原 堀川 屈人

河水減つた朝の澄んだ流れ鮎泳く  
くさやたらに延び畑のどこにも里芋  
日はにぶく諸苗にあたり一日が過ぎた  
長胡瓜眞つ直ぐなかたち此朝のこゝろ  
浪に少し這入り泳法を云ふ空へ手を上げ

新潟 佐藤 豁山人

畦を渡りくるはをみな腰に種子籠  
草を抜きをりくさ鮮かに何處か雛のこゑする  
斧を溪水につけ水を飲む巖のところ

代を搔くをみなならし牛を叱るこゑする

伊豫 菅 木葉

そら豆の莢とて見えず田の水排けない畝間  
種蒔幾つも埋めてあり庭の垣根の土  
耐乏日夜の生活桐の木青々茂り  
麥まだ刈らず麥にまじりてのびたる草の穂

諏訪 藤森 澤 瀧

祈念すわれに地に夏草やはらかく  
一家一壕わが家に夏菊黄色  
梅の實いろづくうごかぬ青空  
柿の木青葉家人しつかりくらす

札幌 近藤 紫村

神兵にあかしや薫り香等歌ふに  
みいくさ日々白薔薇の花地に久し  
雷氣ありてゆふべ地に芍薬の花  
あかしやかぐはしく一すぢの道を來る人

會津 渡部 湘雨

茂る櫻の木の下音たてゝ人佇ち  
空間 蜂一つ飛びつと夏空  
雨の祭路の祭雨降れば白い茨の花  
畑に薯掘るいもいもの強き温みを感じ

岸和田 牧野 秋風嶺

日々好日春空一ひらの雲  
李の花のせせらぎ山ちかくなる  
石榴大木芽ぶく細枝を伐りすつる  
たえず雲うごいて木蓮かたいつほみ

京都 泉 大 畹

馬糧干上りを束ねる雲が西の山ぞら  
進む兵強し守る兵強し夏の月高し  
胡瓜生りしその青さ空の青さ  
薔薇の白薔薇の紅草屋根の新しく

岡山 山本 光王

人とみて初夏の夜のあけし池の水  
家に還る柿の實の青い庭先  
機械の間を工場へはいつてくる學徒夏朝  
日中子供ばかりをる家の木槿の咲いてる

秋田 佐藤 禾黄

木と石と蔓ものの伸びて花咲く  
いたどりの花咲き田の水口に徑がつとき  
熱風ひろくうみで造船所たゝかふ  
建物つゞく門内木のしげり深い

岡山 笠原 大能露

茄子の木の花は一番の花  
夕焼に浴すのうぜんかづらが咲いた  
蘭田をもち女ばかり来て蘭を刈り  
桃を丸かぶりにする歸つて來てゐる居間

栃木 黒丸 古生

警報發令の晚景人とあり胡瓜もみたべる  
雑林ひろし夏雲白しうごく  
いろどりの草花に起つまひるこの家  
樹々この炎天の下みんな唄ふ小さい子ら

新潟 金子 曙山

棒の實 稚い冷えて祖先の墓

山のみづ木苺の熟るゝありて國土  
山を越す暑さ晝顔の花地に咲く  
瀉みづしらじら朝を勢ひ立つ青霞

長野 御所窪 けさじ

雨の間まだ赤くならぬトマトを見る畑に來て  
防火用水に映る螢がゐて童二人が居て  
しづかに語る夏の夜がおそく征く友の話  
空に憤怒の心もて誓ふ朝蛙が時をりないで

濱松 永井 はるを

蒜をこぐ畑の土やはらかなるをふみ  
山梔子の花をみる女みごもりたり  
朝々國民座右銘をいふ妻に黄いろ夏菊  
たけの子竹になり村人と話すひと時

秋田 相場 汀石

雪消えの草の青い野に馬に接近  
山の段々畑にゐる麥青いその私達  
晝顔の花ある郷にして波は遠くから打つ  
濱蓮がある故郷にきた船體

東京 後藤 零子

芝ざくら地に咲き防空壕けふもありて  
椿咲いたを母と子のくらし地に黍まき  
裸身こゝ明るき灯にゐて旋盤工夏の夜  
蟻やすむことなし盛土の大根花さき

諏訪 宮坂 昏風

人が帽子をかぶり梅の實しつかり生つて居る



夏朝沖に漁するに一脈の雲の動く  
麥殻を焼く大きい火朝の地面  
青嵐の如く兵士を送るこの朝

長野 半田 雨衣

しほし憩ふ土堤にて穂麥の高さ  
畔を塗る男の裸陽ざしにうごく  
出動雲低き朝を穂麥のしめり  
眞晝の山畑や蕎麥を蒔く少女らや

東京 沼 文生

池に水に釣り人に郭公がなく  
舟はゆく小波よせ來睡蓮花  
哨戒機とぶこの沼にこの青い萍  
土したし杉並木をゆく夏朝のみち  
草にうるほひあり征く家の朝

横須賀 一ノ瀬 碧水樓

六月海に島が近く親しさ人よ  
山苺咲くはたのし崖の根に住める人々  
潮騒近し今夜単衣着て疊に坐る  
茂り地のひとところ大いなる牛蒡の葉  
國戦ふ紫陽花さける家の根が且

京都 松宮 磨研

藪に風ふく低い梨の木花はつきりと咲く  
山に藪が生え山鳩がないて清淨  
女達みな茶摘みにゆく靄のある朝  
豌豆をもぐほどの畑あり人住めり  
幸を思ふ豌豆の莢をむくときこの日

諏訪 武居 泊雨川

麩芥もやしてしまふ男に麥の畝まつすぐ  
水田さゝ波が立ち工場鐵を削り  
微笑するきもち山吹葉になつてゐる  
葉につままれて桃の實が手のとどくところ  
肩が暑い木にうごく桃の長い葉

東京 林 鷺水城

待つあるを待む矣宵暑く木の花  
朝とまとをちぎる在りて薄のみづ  
敵近し山近し夏の夜大空  
少女にお盆の日の日傘庭の石  
決戦の決戦期來る早天海がみえる

越中 宮岡 珠錦樓

島の木槿花さき狭い路次から路次へ  
夏の日くるこの沖合の潮の流れ  
沖はるか來し六月夕潮のさわぎ  
船は外海に出る薄暑の空のいろ  
夕立來る満員の舟へしぶき

越後 長谷川 杉郎

山梔子咲きゆふべひさかたに見る空  
金魚鉢透明朝めし喰はん主は  
紫陽花存分に咲き家のひとみんな家にをる  
風冷える地にはこべの花息してゐる  
のうぜんかづらだんだんくらくなる家に父とをる

秋田 木内 柳陀

鴨を打つ舟あれば舟に乗り

草を摘む高い土手でもない  
野火くさい風ふきお日様  
遅櫻ひるの日を眞上にす  
山菜採る澤だんく深く

熱河 山村 九十九

枯草ばつたをりくに飛ぶ冬に向ふ徑  
地に霜あり草もみぢするもあり  
決戦こゝの草芽ばえてゆくべし  
春の雪けがれざるまゝに溶けゆく大地  
夏の樹々大きくたてり地にすめらぎの大恩を感じず

越後 須貝 秀

夜勤明けて戻る玉葱掘るばかりの畠  
寸土麥植はりし麥の青い穂に祈る  
夫妻に覆青葉疊にひとり子をりて良い子  
瀧田水冠る見る淨魂人々と  
仔猫夏仔足にからむを疊をあるく

山形 爲本 鉛人

この小道つぎるところを氣にし夏雨にぬれる  
日射し目にいたし並木の幹乾いてゐない  
風庭石の面にそひゆくやう瓜の花ゆれる  
夏山に峰々にそひ動く雲に厚みあり  
仇うたんこの國ぶりの南瓜花咲く

東京 根岸 榮一郎

練兵場廣く翼くるを兵となる日  
兵としをろがむ御眞影この朝の地が凍てゝ  
一兵の構へ軍帽をかむり霜どけの道をゆく

山容せまり春夜の星が瞬く寒氣  
春夕風吹きやまず松並木つゞく街道

大阪 淺野 麗木

ある時ほくほくけたたんぼよのそば去らずに  
著莪の花さく草々そこより茂り  
風つよく吹く青蛙を來ふみ堪へてゐる  
雨うつ石々石よりのひるがほの花  
代搔くに風あり畔の菜莢の木

東京 今井 六石

いちにち梅雨降り庭に水溜つた逕があり光る  
櫻青葉の中に長くわが家の屋根延びゆふべ  
ものをやく炎たつ葉ざくら幹たつところ  
庭向ふの一室に灯が低く黒い帷子の父  
豆を出して焙るにほひが消えてゆく薄暑

秋田 相澤 華芳

朝に祈る音なく辛夷咲くこゝろ  
辛夷たかく咲く日の昏るゝ身邊  
菲畑松毬落ちるなどおのづ周邊  
あぢさる若芽隣人と癒りなく在り  
原遠し原霞みたり人の來るにて

東京 吉川 金次

くちなし咲く疎開した子供に  
故郷われの前立一本青い筍  
家を去る暑い日水とにぎりめしをくつて  
ぼく子がゐる工場の窓から見え合歡の木  
たりもろこし小さく生るシャツ着て工場に行く

# 指針を記す

中塚 一碧樓

「俳句日本」第一號の句より若干の句を抄出して之に句評を試みながら些か我等の「俳句日本」の句道について話して見たいと思ふ。

之によつて、作句修行同志の人々のために多少の参考となり、又は初學入門の人々の爲めに良き指針を示し得る事が出来れば幸である。

喜谷 六花

麥踏む横あるき娘筒袖の腕を組む

我等が先覺六花和尚の一句である。筒袖の着物をきて、腕を組みながら、横へ横へと横あるきをしながら麥を踏んでゐる一人の娘、これはいかにも可憐な素朴な姿ではあるまいか。思ふに娘は何らあせる事もなく黙々と靜かに而かも一途に麥を踏みつけてゐるのである。しづかに確かりと働きつけてゐるのである。この姿こそは誠に良き御民のすがたそのものと言ひ得るであらう。いま、この姿と全然一つになり切つてゐる此作者の澄み切つてゐる句心を觀る可きで、その娘の良き姿は同時に此作者の良き句心といふべきである。句を作すものはかうした所まで心を澄まし、さうして斯のやうに慥かに詠み表はすべきであると思ふのである。

小竹 利和

枯草にぎり敵輕機の間斷を待つ

これは大陸に戦つてゐる勇士の一句である。現地でのありのまゝであらうが、一句の勢いき／＼として僕たちの胸を突くものがあり、まじぐらになつてゐる作者の鬨魂が自らひびいて來るのである。此場合「枯草にぎり」といふ事が如何にも確かにその情景を躍如たらしめてゐる。

「戦の俳句はどうも現地の人々にはかなはない」といふ聲をよく聞くのであるが、實際僕もさう思ふ。こちらに居て作る戦争の句はやゝともすれば作りものになり、どうも句の表面ばかりが強くなつて其の割合に應へて來ないものが多いやうである。句材を戦争に取つてゐるからと云つてその句がいゝといふ事は無論ない。銃後にあるものは寧ろ強い戦意とか、張り切つた鬨魂とか、さうしたものが自らに出るやうな句であつたらばと思ふのである。

三雲 城東

池 水にどん／＼雪ふる工場へ急ぐ

「池にどん／＼雪ふる」と言はず、「池水に……」と云つてゐる作者の明確なる心持實にいゝと思ふ。工場へ急いで行く途に、池にどん／＼雪ふると思ふ事さへ、かなり勝れた思ひであるが、更に「池水に……」と思ひ、さう云つてゐる作者の心持は如何にも透徹してゐる。

「池にどん／＼雪ふる」と云つても、水へ雪が降つてゐる事は凡そ判るのであるが、それは判るといふ程度であつて、「池水に……」と云つた事によつて始めて本當の表現を得たと思ふのである。

大體、「これで判るであらう、これで判る筈である」といふ程度の表はし方では、常に一句が力を持ち得ない、どこまでも突きつめて本氣にものを見るやうでなくてはなるまい。「池にどんく雪ふる」と云へば、もう「池の水に雪が降つてゐるにきまつてゐるではないか」と直ぐに片付けようとする人々は此作者が「水」を思ひ「水」を言つてゐる點を一考して欲しいものである。

谷口 矩良

これを食るとし摘草淺みどり  
この母の背低ければ藁靴愛とし

傷漢軍人療養所にある勇士の句であり、此號の此作者の句々振つてゐる事を太だ喜ぶ。第一句の度しく素直な心持、まことに敬愛の念を感じしめる。「食るとし」といふ「し」の心、「淺みどり」の持つ情、一句格調の高きを思はしめる。第二句の「愛とし」は「いとし」と書くべきか、之は情愛溢るゝばかりの一句であつて、或ひは療養所へ面會に來て下さつた母堂の姿であらうかなど想像される。背低ければといふ事もその母堂の姿をはつきりと表はすと同時に作者の情感を明かに示し得てゐる。療養所に病を養つて再起奉公の念に燃えてゐる作者の心持、背の低いお母さんが子を思ひ國を思ふ誠心、藁靴を履いてゐるゝ其姿、さうしたものをじつと思つてゐると自然と胸がつかつて來るを覺える。感吟といふべきであらう。

山田 蒲公英

雪残るあかり林の中人のこゑする

暢達、堂々たる一句である。雪あかりの林の中に人のこゑがするといふその寂は、雪の林中に人がげも無く、ものゝ聲も無いといふ寂よりも更に閒寂であり、すぐに身に應へて來る寂である。「殘雪林中無人影」と云つても相當氣持は徹るのであるが、それでは既に言ひ慣らした一通りの事としか感ぜられないし、一句を作つたといふやうな感じがあるのである。「人のこゑする」事によつて却て一句の心が生きくとして句の寂が本ものであると思へる。

先人は「師の風に泥まらず」と云つてゐるが、更に「敢て古風に泥まらず」とも言ひたいのである。「古人のあとを求めず古人の求めたることを求めよ」とも云つてゐる。これら味ふべき言葉であると思ふのである。

妹尾 美雄

ずつと遠く來て野蒜をとり野蒜を揃へる

野に親しみ、野の草に親しむ事は人の幸である。とりわけ野蒜などは實に親しみの深い部類であらう。この句について特に注意したい事は句末の「野蒜を揃へる」といふ處にある。遠くの方へ來て野蒜をとるとだけ云ふのでは心持はいゝのであるが、何だか一つの定石に終つてしまふやうである。こゝで「野蒜を揃へる」と云つた事によつて如何にも明かに作者の落着きやら作者の確かさが感じられ一句が生きたものになつてゐる。句が立つてゐるとも云ひ得るであらう。定石をただに定石に終らしめず、定石を生かす事このやうでありたいと思ふのである。

# 新俳句論 研考

新俳句の發想 基礎論 (1)

西垣 卍 禪子

## 新俳句は生命・生活の欲求である

我々是我々の制作を新俳句と命名する。而して、新俳句は過去の俳句一切の疑問と不満とに自ら内省的檢討を與へ、今日の我らの正しき理論の希求として誕生せるものである。

我々は、我々の生命的要求から我々の俳句藝術を主張する。我々は新俳句が意味する生命的藝術を以て東洋文化の精髓であると信ずる。又、完體にしてしかも最も純眞なる形に於いて、直截にその眞を體認し得ることを確信する。(完體に就いては後述する。)

我々は新俳句の發想に起筆しなければならない。新俳句は我々の精神純化の糧に咲く藝術である。言換へれば、我々の生活々動を短詩藝術のニ形式をもつて表現なせるものである。故に、短詩形態をなす我々の新俳句は、我々の生活々動たるところの生命的欲求として、發想すると云ふことが出来る。

人間は生命のあらん限り生活上に永遠の苦闘をせねばならない。茲

に於いて、如何にせば快樂的に生活し得べきかよりも、如何にせば意義あるとして價值的な生活をなし得べきかの問題が重要となるのである。これは全的な生活を意味するものである。故に、我々は、生活を充實せしめ、精神生活の偉大さを高揚しなければならぬ。而して、藝術はこの分野に於いて生命の欲求に依るところの生活活動と云はざるを得ないのである。

この意味に於いて、普通我々の制作が生活を基礎とするとか、生命の叫びであるなどと云はれてゐるのである。人は創作意識に於ける各個の立場の認識上、その制作態度なり、思想なり、感情なり、或はまた精神的信念なりに相違あることは言を俟たない。然し、いつれの立場からしても——藝術制作が一面に藝術自身の獨自の領域にあるとしても、人生を離れて生じないことは間違ひないのである。死を以て人生々活を一トくぎりとしたならば、生の永遠を希求すると同じく、藝術の永遠性を制作に希はざる者はあるまいと思ふ。又、人は實生活上の要求として、人生の幸福を研らざるものはない如く、總ての人生現象は皆欲望を基礎とすると云ひ得よう。故に欲望の根元に還元すれば、藝術も宗教も學問もみな欲望の無限を希求する内的意義を具有し、人生の幸福もこの欲望の根元的原動力に歸着するものと云ひ得る。而して、欲望が第一であるが、これは單なる欲望ではない。即ち、人間の表面的活動に現れた外面的欲望をもつて全欲望の意義としてこれを限定すれば、我々は動物と共通する生活形式に従ひあるのみで、人間としての特長もなく、文化現象なるものゝ存する理由もまたなきないも

のとなるのである。欲望の意義内容を單に外的現象の方面のみに限つて觀察しては、眞の人生觀は成立するものではない。欲望の内面的意義を發揮して我々の生活を充實する生命の存立、それは生命の本質的要求として、人間、文化の進化發展に最も重大なる意義をもつと云はざるを得ないのである。

されば、所謂文化現象の存する所以は、欲望の表面的活動以上に内面的意義に在ることを認めるところに、眞の人生的意義を成立せしめるのである。この内面的意義とは生命の本質的要求と云ふことである。その、生命の本質的要求とは如何と云へば、人生は結局生命活動の發現であると云ふことを前述したが、その活動の根本要求とは何か、と云ふことなのである。即ち、生長、榮養、順應の三つの特徴を云ふのであつて、この特徴を有する生命の根本動力はまた何であるか——それは生命の内部にひそむ原動力を求むるところのものである。即ち、生の本質より推定せらるる自發的要求と云ふことであつて、この自發的能力の多い程進化の度が高いと云ふことになる。この他生命の本質的要求として、自己持續の要求、自己擴大の要求とを擧げねばならぬ。以上の三大要求の力を以て生命は自らより持續し、より擴大し、より自由にならうとする要求が絶えざる進化を促すのである。然らば、何を目標として、何によつて進化するかと云ふ創造的進化の根據がまたそこになければならない。

意志は盲目であると云ふことから、創造的進化には一定の目的がないと云はれてゐるが、生命の特徴として内部に備はる一定の要求があ

る限り、生命の進化はその三大要求の實現と看做すことが出来る。従つて、生命活動に一定の方向を認めねばならないが、生命が一定の方向に躍進する傾向を持つてゐても、これを實現する段になると種々の矛盾にぶつかるのである。生命は絶えざる進化であると同時に、進化を實現する爲に絶えず苦闘を経ねばならない、自然に對して、又他の生命に對して、或は自己内部に對しても常に戰である。然し生命の進化は争闘のみで出来上つてはゐない。そこには協同し、妥協し、融合する必要が生じる。されば、生命の眞髓は、生命が自己の要求を實現するための破壊と建設、争闘と調和とに依る創造に外ならないのである。

かくて、欲望に於ける内的意義、それは生命の本質的要求として、創造的進化の目標である。即ち、永恆の持續、無限の擴大、絶對の自由を屬性とするところのこの統一的大生命（無限絶對的生命）の實現を以て人生最後の歸趨となすと云へよう。言換へれば、この無限絶對的生命とは人類の活動に依つて創造的に實現せらるべき可能態であると看做せる。それは、我々の生命の内部に活動しつゝあるものであり、我々を鼓舞し、推動してゐるかに思はしめるところの根源的一大力とも云へよう。

ここに注意すべきことは、人類に於ける欲望は感情生活に至つて非常に複雑である。特に理智の作用の發達が著しくなり辨別力は又一段と強くなるものである。即ち、感情は欲望と直接關聯して、苦樂の示

峻は生命の安危を司り、意志は活動の機關として生命要求の遂行を司り、辨別力即ち理智作用は感情や意志にその方向を指示するの役目をなすものである。以上の見地から云へば、生命の原始的衝動たる欲望も、最も發達したる理智も同じ目標に向つて活動をなしてゐるものであるが、實際の活動に於いて多くの衝突をなす。欲望は盲目で強力であるから理智の拘束を脱し、或は理智そのものをも奴隸として我意を妄にし、生命の針路を危険に導くものであるが、理智に偏することも亦生命の創造を阻む。欲望はその内的意義を發揮し得ずに欲望そのものに拘泥することは大理智の缺乏によるとなし得る。この意味に於いては欲望必ずしも煩惱ではなく、その意義の發揮によつては「煩惱即菩提」となり得るし、大生命實現の菩提道となるのである。

かゝる見地からして、我々の新俳句——藝術の價値は、生命の本質

## 俳句と時代性

内 田 南 艸

今度、不定型俳句が打つて一丸となつて、「俳句日本」を刊行するに至つたことは、俳壇の爲めばかりでなく、國家の爲め欣快に耐へない。従來、不定型俳壇と云へば、層雲と海紅とが代表的のやうに考へられ

的要求としての一大生命（無限絶對的生命）の希求であつて、單に盲目的欲望でもなく、又、知見に偏した臆想ではなく、全人格的な體驗（全人的直覺の根本體驗）そのものが尊い價値なのである。ここに始めて、作品を作ることによつて心境を開き、心境を開くことに依つて己を高めようとする鍊行の俳句道があり、俳句することを一つの「道」として行持する精神的の意義を見ることが出来るのである。

上述の如く生命の眞髓はこの一大生命（無限絶對的生命）の希求に於ける價値創造に外ならない。この規範、この價値は、我々の意欲する上に於いて、思惟の領域に於いては眞となり、意志の領域に於いては善となり、感情の領域に於いては美となる。されば、全人格的な體驗を生活の價値として、表現せんとするところに東洋文化の精髄はある、即ち、生命的欲求として新俳句藝術の發想があるのである。

てゐて、其の他の多羅葉にしる、新日本俳句にしる、又北斗にしる、前二社に比較すれば、その集團は量に於て少數であつたが、どれも皆將來に大なる希望と理想とを持つて、着々その地歩を固めてゐたのであつて、云はゞ發展途上にある若木のやうなものであつたのである。即ちいつも新鮮、潑刺とした若さを持つた集團であつたのである。然も此等の若い集團が、いち早く新時代の機運を洞察して、先に「陸社」の創立を見たのであるが、これが再び、時代の要請により、層雲、海紅と合同するに至つたのである。元々層雲と云ひ、海紅と云ひ、又、

陸の集團と云つても、各々独自の主張があるのであつて、唯不定型俳句であるといふところに一致點があつたのである。従つて、此等三結社は、當然一つになるべき性質を持つてゐたのであるが、これは單に形式に於ての一致點を見出したに過ぎないのであつて、此の儘單に結合したといふことであるならば、それは、佛作つて魂を入れぬやうなもので、不定型俳句の綜合雜誌の建設に外ならない。はたして、こんな形の上の統合でよいであらうか、……大東亞戦争はいよ／＼懐愴苛烈、日増しに深刻である。皇國興廢の關頭に立てる秋、皇國の尊嚴を維持し、歴史の名譽を保持せんが爲に、國家が我々に要求するものは戦力増強の爲に、俳壇總蹶起による文化思想戰の展開である。即ち、俳句を通じて、國家に奉公する民族的文化運動でなければならぬ。そこで我々は、形の上の統合から、更に進んで、指導精神に於ける統一がなければならぬと思ふ。

從來俳句と云へば、専ら花鳥諷詠に終始し、俳句は自然親愛による自然諷詠詩であるやうに解されてゐたのである。成る程俳句に於ける自然觀照は、それが藝術的良心と深い情熱とに基く場合寫生句として立派なものもあるが、大部分は現代生活とは餘程縁の遠い遊戯的、逃避的なものになつてしまつたのである。其後、たゞ／＼この花鳥諷詠に對して、俳句は、生活の詠歎に基くものとして、生活本位の俳句を主張するやうになつたが、これが雄健、素朴、明朗、高雅等の生活表現であれば申分ないのであるが、單に個人の生活を無暗矢鱈に禮讚した結果は、荒々しい物資生活の描寫を事件的に取扱ふ傾向が生じて、

そこに俳句としての潤ひもなければ、深さも無い、ある場合には、卑俗、低劣、遊惰等、不健全な生活句を見るやうになつたのである。ところが、大東亞戦争を契機として、俄然日本精神の勃興となつて、個人主義に基く自由は否定せられ、すべて我々は、日本臣民として、天皇に奉仕するを第一義とする皇國臣民道の實踐が強く要求されるに至つたのである。實際我々は、歐米の物質文明に眩惑されて、おのれ自身に内在してゐた神ながらの尊い道を忘れてゐたのである。實に大東亞戦争といふ大きな警鐘が鳴り響くと共に、心の奥底に眠つてゐた、我々日本人本來の精神が蘇つたのである。ユダヤの金權主義を排して、道義による大東亞新秩序建設の爲め、我々は劔をとつたのである。然して今や、前線の將兵は國土防衛の爲め、空に、海に、陸に勇敢に戦つてゐるのである。この頑敵を撃ち攘つて、大東亞を泰山の安きに置くには、我々の責務は重大である。このたゞならぬ時局を認識するものは、劔をとるものも、ハンマーを握るものも、鋏を打つものも、等しくその職域に於て、御奉公の誠を致さねばならぬ。かくしてこそ、頑敵を撃ち破ることが出来るのである。斷じて勝たねばならぬ戦争である。

かう考へると、一體、俳句は、この時局下何を爲すべきであるかといふことが感じられると思ふ。私は、これを國民感動の發表と言ひたい。即ち現代に於ては、路傍の一本の草も、一つの石ころも、みな皇國の草とし、石として戦つてゐるのである。それは、單なる一本の草でもなく、一つの石ころでもない。日本人であることを意識してゐる



ものにとつての國民感動の發揚の對象物に外ならないのである。私は「俳句日本」の指導精神は、どこまでも日本臣民としての感動表現でなければならぬと痛切に思ふのである。即ち、自然も、生活もすべて國民感動の坩堝の中から燃え上つて來たものでなければならぬと思ふ。世上未だ藝術至上主義を唱へるものもあるが、過去に於ける藝術至上主義が、個人の名譽を傷つけ、國家の發展とは凡そ縁遠いもの、

## 開目鈔

(入門俳話)

萩原井泉水

お精靈さまこられる頃のとなほ家のまへの田

松尾敦之

平常の句といふことと、平凡の句といふことの區別は、解る人には何でもなく解ることだが、それが解らぬ人に、解るやうに説明することとはむづかしい。禪家の語録に、「平常心是れ道」といふ言葉がある。俳句の道に於ても、「如何なるか是れ道」と問ふあらば、「平常心是れ道」と答へて差支あるまい。家のまへの田がある、そこに蜻蛉が飛んでゐる。何處にでも有りふれた、景色といふにも足りぬ景色である。田舎は盆と正月とを一年の二大行事にしてゐるが、お盆だと云つても、

あつたことは、我々のよく知るところであつて、藝術至上主義の誤まつた觀念は、國家意識に缺くるところがあつたからである。今日の俳句は今日の國民感動が作品の中に奥深く籠つてゐなければならぬ。……自然の諷詠でも、生活俳句でもよい、すべて國民運動の一翼を擔つてゐることの自覺に基くものであればよいのである。

何の目を慰める物があるのではなくて、いつもの通り、家の前の田に蜻蛉が飛んでゐる。だが、此の平常通りの何の奇もない處に、先祖代代の佛さまの靈を慰めるものがあらう。「お精靈さまこられる」といふ親しみぶかい言葉も、しみじみとした氣持が出てゐる。「頃の」といふ概念的になり易い言葉も、此句としては、自然の厚みをもつた感じとして、好く使ひこなされてゐる。

日に日にくらし簡素に厨の布巾白うかはいてゐる。

鈴木蜻郎

「日に日にくらし簡素に……」は現今時局下の生活として、説明するまでもない。かうした抽象的な言葉の、俳句にはまとめることの難しい言葉を取り上げて、ふつくりとした一句に作りなした作家の技倆をたたへたい。尤も次に「厨の布巾」を取り上げてゐるのだから、此の「くらし」といふのは食生活のことであつて、僅に一二品のおかずだけで

お膳をすました、それで足りてゐる、といふつつましい氣持である。恐らくは夕食の後であつて、日の永くなつた夕日がまだ窓に残つてゐる感じも出てゐるやうである。「布巾の白うかはいてゐる」、この白くといふ清らかな趣、かはいてゐるといふ小ざつぱりとした趣、それらにも、日日の生活を與へられた生活として、奢らず、又、不平もなく、つつましく整頓して暮らして行く、ほんたうに「くらし」といふことを人間的に味つてゐる、一市民の「くらし」の意識がにじみ出てゐる。で、此の「くらし」といふ日本固有の言葉が言葉としてよらしい。「生活」などと云うてはかたくなつて悪いのである。

はなかんでもらつてゐるのもおまつり

平松星童

定型の人からは、何だ十七字に出来てゐるではないか、と評されるかもしれないが、何字に作らうといふ既成の氣持ではなく、すつぱりと竹を割つたやうに内から割つて出た言葉そのまゝが句になつた、實にナイーヴな句である。さうして、その表現の純眞さが、此の内容の無邪氣さとも相應じて全體無縫の好い味を出してゐる。齡は四つか五つであらう、男の子か女の子かはわからないが、長いきれいな袂の着物を着た女の子らしくも思はれる。いつもならば、鼻汁を取るのをいやがるのを、今日は好い着物を着てゐるので、をとなくかませせてゐる。ほゞ多ましい句である。半年程以前に――

こどもおまつり木の橋あるく 俊 二

といふ作もあり、それから影響をうけてゐるかも知れぬが、寧ろ句鬼弟だと思たいのである。

水にしづめてあるさかづきの一別以來

山本木天藪

盃洗の盃を「水にしづめてあるさかづき」と表現した、この言葉に、わざとらしい氣持を感じる人があるかも知れないが、私はそこに、味のある物の見方を感じる。それは單に、物をおもしろく見たといふだけではないので、此場合の此氣持の上から、しぜんと滲み出てゐる情景として生きてゐるからである。「一別以來」といふ二人のそれから後の、語り出せばなかく盡きないであらう、年月の事どもが、お互の音信から離れて、時といふものの中に埋没してゐた。今、それを取り出して、お互の友情の中に楽しく盛りあげようとしてゐる。かう説明するのも、やゝ説明にすぎた嫌があるけれども、この「一別以來」の感情がいかにこの「水に沈めてあるさかづき」に乗りうつつてゐる。とにかく上手の作である。

野口英世が翁島なり雪うづだかくして驛なり

高橋良太郎

野口英世のことは國民學校の修身教科書に出てゐるので、子供でも知つてゐる。教科書には「英世の家は磐梯山のふもとの町へつづいた道のそばにありました。かやぶきの小さな農家で、わらごぎをしいた部屋が二つ、あとは土間となり合せの藁小屋があるだけでありまし

た」とある。此句は、旅中、磐越線を過ぎつゝ見た所感。あゝ此の山の麓の滯しい町が、世界的の英才野口英世を出した翁島であるか、と思ひ、それにしても驛があるとはいふものゝ、何と雪にうづもれてゐる小さな驛であることと思ふ。「翁島なり」で切り、それと同格にして「驛なり」と切つた二行的の表現が、此の所感をふかく思ひ入らしめてゐる。「雪ふかくして驛なり」の「ふかくして」と曲折をもたしたところも老巧である。

赤い少女の頬へ雪々鼓笛隊通る

加藤 裸 秋

美しく、明るくて、モダンであつて、且つ、アツプツデイトである。「赤い少女の頬の……」の赤いは「赤い……頬」とかかるやうにも解せられようが、これは「赤い少女……」であつて、赤い色の揃ひの洋装をしてゐるのであらう。印象的に書いたものとすれば、言葉にさしたる無理はない。「雪雪」はチラ／＼と降つてきた雪にちがひない。「雪雪」といふ言葉は、語感としては、積るほどの雪をおもはせもするが、爰では前後の明るい、はれやかな感じに押されて、その雪は落ちる端から消えてゆくやうである。「鼓笛隊通る」といふ言葉はk, t, t, tの音感が太鼓の音の感じをも思はせて、面白い調子を出してゐる。

海がきれいな月夜の白い海軍士官さん上陸

木村 緑 平

前の句と行き方が大きく似てゐる、感じも似てゐる。これも句兄弟と云へよう。「赤い少女」よりも、此句の「白い海軍士官さん」の方が新鮮であらうか。「海がきれいな月夜」は平俗な言葉であつて、そこに自然にしてゆくのはぬ素朴な氣持がある。海軍士官さんは海から来る、月夜の精の如くあらはれてくる。「上陸」とよつきらばうに置いた書き方も、此句としてははつらつとした調子をもつ。「上陸する」、或は「上陸してゐる」などすると、これほどにいき／＼とした味は無くなると思ふ。前の「鼓笛隊」の句がレヴェニュー風な味をもつとすれば、此の「海軍士官」の句はシネマ風の感覺をもつと云へよう。

汽船がともる港のまちどほりもともる

大越 晋 赤 紅

「港のまちどほり」といふ言葉は、簡單であつて、好く其地理が出てゐる。港を中心として出来てゐる街であつて、中央の町筋が一本、やや廣く、そこには旅館や商店などが並んでゐるが、其裏は島なども顔を出して、夜になると眞暗であらうとおもはれる。今はまだ夕明りがあるものの、人はもうあまり通らない。午後に入港して、僅かの客をおろし、翌は又爰から客を載せて行く、定期航路の二三百トンの汽船が港にはいつてゐる。その橋頭に碇泊燈が掲げられると、町通りの店屋にも亦、電氣の来る頃の灯がともる。斯ういふ句は季節を書いた方がいい、のではないかと思ふが、然し、季節ははつきり書かずとも、秋の夕暮らしい、せう／＼とした、而も一種の人なつかしさの感情は出てゐる。

# 各家近什

福岡 木村 綠 平

白い雲一寸浮かせたりして阿蘇の冬ももう  
草が枯れとる山の上までのぼつておる  
この馬召される子供達青草刈つてきてたべさせるのであつた  
あさ、灯を消さぬ一軒雨ふつてゐる青芦  
もみがらあまるにはとりひるごろ日のあたる梅の木

四日市 原 鈴 華

再び征く廣き肩ひろくして夏を吹かれ  
日々に決戦日々に敢闘母に茄子みのり  
空閑地茄子うゑみ民母の手に咲く  
びつしり花茄子十本ほどわれらが家  
待避壕胡瓜の花三花隣けを拜む太陽

兵庫 山田 宗 作

神州民ありこれは野の草の穂  
大暑島護りはらからはいのちの果てに  
朝にかも小暗きに地に咲きし夏の薊  
宮居蟬鳴く鳴きしきる太木の木うれ  
水ふみて來し眞夏となりし小溝べり

大阪 長 屋 青 澄

蕎麥刈りにきたる島べ流れて溝の水  
やまも、實る木をもつ家の人と一日すぎる  
壕と貯水池とつねに町の夏日々夜々

船尾材を舵柱を建てる向ふに夏海蒼ききはまり  
船用棕櫚太き繩幾巻の着荷炎天

秋田 大越 晋 亦 紅

驛長さんと冬の永いことなど、汽車に乗る  
木々の枝へ空へ春ただいま祝詞奏上  
山から遙か下なる月夜の部落  
薬が匂ふお醫者の出てをる八ツ手の葉  
ここ越して二三軒があるのを知つて雜木道

長野 原 蝦 煎 子

一人のみちについて來る二人月夜  
山のあかるい月夜にて道のあかるい峠を下る  
晝の月も櫻の花の瀾開に出てる  
月夜雨ふるひる刈つた麥島湖をちかくに  
ぼん花の咲く草いきれぼんの近づく山々みなさく

東京 九 貫 十 中 花

葛蒲咲く田のへりにて母と話すしばらく  
よもぎ干してある戸口を河度も出入し家人  
燕の子が糞をおとす見えてゐる土間  
敵近づく南に北に出でて夏夜の星  
南瓜の蔓をふんではならない子供たち踏足で遊ぶ

茨城 渡 部 塚 ケ 君

霧張りつめし山に行く樵夫あり鉞光らして籠に  
常陸花崗岩の石切山色錆びて來るよ草生えて來るよ  
燒 麥 の 麥 藁 亂 舞 雨 に なる 野  
北は雨雲の粟の花陽當りてにひぼり村  
馬耕に男手ある家防人歸りたるらし

兵庫 蓬萊 鷲郎

曇り卯月の雛鶏を一方へ追ひやる  
星見えて雨ふる明り麥の穂の立ち  
兵らみみな馬繫ぐ若葉柿の木  
穂麥風ありこの夜を人と逢はずに歸る  
泥田代田へ眞先に入る水流れ入る

大阪 木戸 夢郎

誰もおんなじ生活をして蔓草の蔓が伸びてゐる  
牛のよい顔夏夕べ静かに暮れる  
むかしからの地藏様で赤いもの汚れてゐる春  
油脂工場へは土橋で荒廢地は甘藷畑旱  
氣狂だといふ人が氣狂ひで石は静に黙つてゐる

上海 加藤 清由

遊んでゐるもののないさくら満開  
いくさはげしい地圖を花あかり  
櫻租界大みいくさの道昭らかなり

東京 福島 一思

もう山梔子の花咲いたこの家に來て主人に對す  
家近く夏めく畑がありそこにゐる犬  
いてふが夏樹ビルに入口あり人みなその方へゆく  
唐もろこし畑暮れる兵舎が近くて兵のこゑ  
山は杉の秀にいづるをおもふ夏の雨のふりつゝ

香川 井上 一二

夢のやうなことばかり去年が今年に枯木陽の照り  
吾子は死なせ人の子を桃のふくらみたる枝  
配給の酒はある風にふかれてゐる巖になみ

ひでりの煙草畑は山畑のたばこはな  
いちめん田が植つて月の鐵工場夜業  
名古屋 加々美 青河

子を愛すこの家の小窗一つ竹の春  
夏草の土手を歩く雲あれば雲に對ふ  
海の水うごく夏の日に浅い舟に坐り  
這ふて膝にくる子あり夏の夜星うつくしく  
わが身征かざる日向日陰の草青し  
山形 和田 光利

やまばとの啼きこころひと平らの家々のくらし  
種もみめぐむ幣のがげが田のおも  
梨咲いて桃咲いて月山は霞んでばかり  
うさぎのふんのこぼれてゐる枯山でひるにしてゐる  
あけびの花こんな山なかの和尙さまとして  
大阪 中原 我樂

地の乾く蔓草が乾く増産けふも  
南瓜の蔓のびる隣人にも言ふ  
壕を掘り貯水池を掘り南瓜黄なはな  
快男子藻川薊の花に何をか云はんとす(藻川を徳ふ)  
君が目をしばたゝき苗代田を見つめるやう(同)  
八幡 飯尾 青城子

デッキに見て瀬戸の渦潮永き日の昏れてとほる  
田舎はくらいといつても灯が春のもれてをる道  
傘ささせて雨の音ちちははの墓にゆく  
松間まだ石槌の白いただき松露撒いてゐる  
礎の石はそのままだに麥のびる雨でふる

## 福岡 加藤迷々可

彈音づしんと來た焦點をつくつて照空燈  
 憤懣の血たぎるを凝つと星見つめる  
 灼熱の陽のそこに鐵火散らしてゐる  
 闖魂燃やす女工員の肢體日に照返り  
 飛機好調に唸り初め照返りのそこから海

## 東京 佐々木 四雨樓

虎杖草に古き思ひのこゝは道灌山  
 土手のすかんぼに入日あり明日も働かう  
 十薬埃の中に咲く工員に暫しの夕暮があり  
 盆となり茂草ばかりの飛鳥山から見える風景  
 親のお盆にきうりをもぐなど裸で

## 神戸 窪田 耕兒

向ひも宿屋の宿の女が雨を見てゐる又しても降る  
 或日はぼけの一鉢を、診察してそのあと閑談  
 病めば塵箱にすててあることしのさくらのはな  
 今日もからだの裏表みせて歸るばかりいくらか暖かな  
 世のきびしさに堪へ南瓜をつくり南瓜花さく家々夏

## 長野 小林 満巨斗

山毛櫟芽ぶく枯笹の山にまばらに  
 かつこうたえず鳴く山の池の水あをし  
 漁舟海にあり海の風うけて麥を刈ることも  
 薄暑逢ひに來し母が室のかたすみ

## 兵庫 井手 逸郎

石があつて水の上をのりこえてゐる水  
 山から下りたところが水管のしてゐる田の水

生野しるがね山へ夏の灼けてある道  
 流れをわたり牛、ねむのねむりそめてゐる道

神戸より疎開の詩外樓を訪ねる

靜かに水にうつつて花の、君釣つてゐる

秋田 池田 亜杜子

伴と嫁と空の下野茨咲く

五月晴船ちくざくゆくなみぢくざくうごく

みな田植が濟んだやうで山の影

みなたにうつぎにて咲く仔馬あゆみ

東京 今川 溪花

母人子をつれてくるに春の川水満ち

池のひろがり見え木々の辛夷の花

紫陽花のはないろづける鳴いて出るひよこ

待避壕縦横栗の花落ち白い花

兵庫 池田 詩外樓

神戸より但馬へ疎開して

挽くものとして貰うて借りて白も

子供いへから豆の花に出てせうべんをするやうす

搗いてゐるおとでここにやはらかく生えてゐるよもぎ

咲いてゐる木のそばで搗いてゐる白の湯氣で

水の白く水におちてゐるのへ戸を締めてゐるよる

東京 細木 原青起

小屋がすゝきが風につゝまれ僕が

南瓜成り花今日咲きたり水をやる

かぼちや伸びる方へ伸びてくる今日の巻藁

青田盡きて畑となりそこまでの道のひとり

東京 宮林 笠村

麥は豊作梅雨前の風音の木々  
梅雨近し幾十鉢の朝顔黄蟬葉  
空梅雨をうれへる心持雪の下細かい花  
闘魂紫陽花盛りあがり動く  
高い太陽青田風筋走り止まず

下關 近木 黎々 火

昏れてより雲のうごく子とある  
栗の花の雨の日關 東方面警報  
晝の汽車隧道いくつか通る灯をもつ  
あめのななめに見ゆる町ふるさと  
月が出た木が一本いつぼん日本

近江 若林 乙吉

牛歩む遅々我に春の川あり  
凍地の谷に杉丸太をおろす丸太いつたいに匂ひ  
兒ら夏の空を樂み夕日大きく  
山の姿と山の色と夏めける女人達  
部落多くは晝を葺き家のぐるり瓜を賣らし

東京 上原 晃 雨草

なべてすめらぎに歸しまつる夏の海はろけし  
子をあやすを見てあるみんなやがて旗ふり  
富士に襦袢よくかはいてる茶畑茶摘  
縁日の乞食座すべき月に座したり  
墓から墓へむぎわらしほから小供背をまるめ  
羅宇すげてるにからたちの花咲いてある  
烈日のもとと世界一の美少年航空兵

青森 柳田 流矢

藁屋ふる雨のその家の燕としも来てある  
昔なら都落ちといふくらしの夕べは紫蘇の葉  
はがきに一錢貼つてこのところ青田のあふれ水  
面會許されると餅負うてゆく日の松蟬  
隣り近所みんな征つてあるお祭が来て提灯

東京 南 晴星

街に二里半合歡咲く部落から人の加はり  
早朝少女が立つ芝生を匍つてすゝみ南瓜の花  
農家民家栗の花が咲くこどもふとり  
話してをるに百日紅木の間星見えてある  
國を護るこゝろ天に満つおもひ夏夜

東京 米倉 勇美

汗を流し流し増産の鋏光る學徒出陣  
菜種燃え出で揚羽も来て子供も増産必死です  
春日麗ら必死の黒土掘返へされ増産隣組  
南瓜の雄花と雌花と大きな夜明けたり  
地薄暑ひよこのときか立ち

東京 高橋 晩甘

松葉ぼたん咲きおやぢたいてい家にをり裸でをる  
敵撃滅の戦機額の蕾みな青い  
遮莫わが家夏來り元義一行の細軸  
むかしも母よ露の苦汁に手をそめて今も  
歩いて花菖蒲が水に義足に靴はいてある君と  
水田いやひこりつりて早乙女田植のはじまり

富山 高橋 良太郎

## 山本元帥の墓に詣ぐ

東京 木下 笑風

墓の中の墓としすすしく掃除しましたところ  
から梅雨のやうな栗の花たばこやあかいかんぱん

名古屋 池原魚眠洞

風の日が雨の日が五風十雨といつた此頃柿の芽  
桑は桑の芽麥は麥の穂人のある丘夕日になる  
釣るそばのほほけたんぽぽ風がくると散つてゐる  
見て通る苺畠にほつほつ苺朝日朝々あかい  
とぶ影も夏の蝶々陸軍墓地に拜してゆく

## 句評

井上三喜夫、林・雀背、九貫十中花

土のついた地雷ぶらさげて歸り置くに地の芽草（昇）  
【三喜夫】朗誦に堪へる程の秀句とは思はないが、稍本質的なものが  
顔を覗かせてゐるから、それに觸れてみたい。

「土のついた地雷ぶら下げて歸り置くに」と言ふ散文的表白で、北支  
隊にゐる作者の位置する實生活や動作が髣髴するのがよろしい。作者  
はさうした戦場に在つて、ふと囁目した「地の芽草」に時の推移を感  
じて驚きの目を瞪つてゐる。そこに詩があり、感傷がある。唯、兵隊  
の誠實をつきつめてゆくと、これでよいだらうかといふ思想的な疑問  
が残るだらう。

【雀背】現實そのままを何等巧まずそのままに表現し得た作者の技量  
を賞し度い。作意はむしろ古いと言ふべきか。

實を吊し蔓結ぶ南瓜の大きな花  
牡花を媒介する南瓜隣へも垂れて  
汗づく兵に水をやる紫陽花うすむらさき

悼道廣宣彦君

紫陽花薄むらさきの夕べ君の計をきき

悼へ送る

武運禱る神棚に柎一枝をささげ  
菊鉢に野菜よく實のり葱青し

【十中花】この句の地雷は恐らく敵の地雷であらう。わが勇士達の進  
軍の邪魔をする敵の地雷を掘り出して悠々陣地に歸つて來た事を云つ  
てゐるのであらうが、それを置くと地地の芽草を忘れず觀取したとこ  
ろ、戦線にある一人の俳句作家を思ふより、まことに豪膽であり、然  
も日本精神の華といつたものを發揮してゐる一人の勇士をまさまざと  
見るのである。

いでたち同じくて並ぶ肩に降り春の雪（羽六）

【雀背】吾子を國へ捧げる父としてのこまかい心情が窺はれる句であ  
る。が、作者が現實に把握したそのとき的情感が、句表にしつくり出  
てゐないことをうらみとする。「いでたち同じくて」が唐突の表現であ  
り、それにつづく下章が凡て遠慮がちとなつてゐるからだらうと思ふ。  
【十中花】飛躍性のある句とは云へないが、長男入隊を詠つたものと  
して或る程度成功してゐる。總體的に沁々したものがあつて、殊にこの  
場合の「春の雪」は昂ぶる心をおさへてゐる。



一筋春の川をかんにじてる工場のうちにある (金次)

【雀背】一つの信念に生き、不動な思念を貫かうとしてゐる作者が感じられる。うわつ調子な表現方法でないからだらう。が、「かんにじてる」「うちにゐる」このどちらかど、どうかならないものか。今後私共が進む方向上研究を要するものがあると思ふ。さういへば、一筋も問題となるのではないかな。

【十中花】旋盤の句を澤山作りたいと云つたこの作者は今ももうすっかり工場に馴染んで来た。「一筋春の川をかんにじてる」など仲々落着いてきたものだ。然しこの落着きは、落着きの中に鋭敏な感受性が窺へ、これは作者のきびしい作句態度がものを云つたと云へる。この句旋盤は出てゐないが旋盤はいま静かにそこにあると思はれる。

そちこち疎開する話も床屋の鏡に梅の、梅のさく話 (康治)

【雀背】時局の動きに、作者の感性が頭をもたげ、そこからの複雑した感情を、「」にものを言はしてゐるこの技法に就ては他日に譲らねばならないが、この句の内容を検討するに、他にいくらでも簡潔な表現方法が採られ、採らねばならない必然性のあるものがあるやうに思ふ。これは今後の私共の課題として充分研究すべき主要事だと思ふ。

【十中花】この作者は疎開する話と、梅のさく話とどつちを重くみてゐるのだらうか。ときに梅のさく話を主にしてするものもよろしいが、疎開といふ事を軽々に取扱つては困る。まして「床屋の鏡に梅の」など少しも面白くない。一句の散漫なものも不満だ。

みそらはひばりのおにぎり (昶雨草)

【三喜夫】此の句のおもしろみは措辭にある。「みそら」の「み」に何ものかがある。と言ふよりは、その「み」で此の句は平凡から救はれ

てゐると言つた方が適當である。作者が大空に對してありがたい氣持である詩的感情がこの「み」に集つてゐると言ふ感じた。然し、みそらとひばりとおにぎりと言ふ常識的なものが四・四・四調の表現となつたので餘りにひつつき過ぎてしまつた憾みがあるだらう。

【雀背】手際よく表現された句である。然しこれを一讀したとき、私は三十年もの昔のことが思ひ出されるのだつた。然しよく検討して見ると、作者の思想に流れてゐるもの、それは今日の決戦下の皇國民でなければ求めることの出来ないものを感じて頭を下げたのである。

【十中花】簡潔に表現しようとした意圖には賛成するが、言葉の驅使が十分でない爲に一句を薄弱なものとしてゐる。

一ときあらしがそれから雨の榛の花房しづかにて春 (三良)

【三喜夫】この作者も亦國を護る一人として、その一日は決してしづかなものではないであらう。匆忙と我を忘れて眞劍に生きてゐれば、或日はあらしさへ訪れて、それからしづかな雨、作者はふと春を感じたのである。「一とき」とか、「それから」とか、時間的言葉に據つて結ばれてゐながら、この句の落ちついた抒情は優しく美しい。然し、その餘情的表現や、手の混んだ言ひ廻しや、二十九音といふ音數律から、餘りに短歌的ではないかといふ疑問が残るだらう。

【雀背】春をぢつと見てゐる。それをかうも表現せねばならないものか。「一と時」「それから」「しづかにて」この三つの再検討を促し、前評句の「みそらは……」と對照研究して見る要ありはすまいか。

【十中花】「一ときあらしがそれから雨の榛の花房」あたりまでにもつと心持を打込んでゐたら「しづかにて春」などといふ説明に墮するやうな言葉でないものが出た筈だ。終りをあつさり結んでゐたらこの句は光りを放つた事と思ふ。

# 句 輯

喜 谷 六 花

藪 淺 い と ころ に 山 家 の 山 吹 は ひ と 重  
 山 の 草 を 採 る に 聲 放 つ 鳥 聲 を ひ く 鳥  
 警 報 下 こ ん な こ と を 朝 顔 を 鉢 に 上 げ る 垣 ぬ ち  
 お ほ ば こ の 花 逕 に 農 女 の 目 禮 を う け る  
 水 に 岬 形 に 茂 り が 突 き 出 で 船 を 見 な い 沼  
 空 の ひ ろ さ 山 の な い 地 の 廣 さ 麥 秋  
 出 穂 の そ ろ ひ 神 さ ま が の げ を 忘 れ た 小 麥

林 雀 背

菊 鉢 の 南 瓜 も の び る 主 婦 モ ン べ ぬ ぐ 日 な く  
 二 階 で 茄子 も 作 り 朝 顔 忘 れ ず 軒 に 這 は し  
 こ ん な と ころ に 南 瓜 が 生 え て あ る け ぶ 壕 點 檢  
 征 く 青 年 の 肩 の 埃 は ら ふ 組 長 汗 び つ し よ り  
 爆 音 け ふ は 西 か ら の 空 へ 人 形 の 顔 が 向 い て あ る  
 け ふ こ そ 映 畫 を 見 よ う 皆 と 群 長 防 訓 を 終 へ

Y氏應召

君 必 勝 の 胸 た か く ま つ か な 日 の 丸

内 島 北 琅

麥 を 刈 伏 せ て 蝶 々 た ば ね て 蝶 々

野澤温泉にて

ど こ か に 蚤 が る て 障 子 月 夜

湯 の 町 夏 夕 べ 大 き な 牛 の 角 曳 い て く る  
 山 が 青 い 何 處 も 青 い 小 使 室 の 小 使 親 子  
 山 が 青 い 山 の 學 校 か ら 出 て く る 蝶 々  
 吹 き こ ん で く る 霧 に 二 階 三 階 松 の 木  
 青 い 笹 む け ば 白 い 餅 の 宿 の 霧 雨

古 林 巴 水 樓

夏 に な る 林 が 栗 の 花 雲 の や う な  
 木 の 中 木 を 挽 く 涼 し く 挽 き や め て あ る  
 此 の ま ち 海 軍 さ ん 鳥 居 ま へ 若 葉 の ぬ か あ め に 歩 い て あ る  
 疎 開 の こ と は 聞 い て あ る 隣 り の 柿 び つ し り 花 つ け て あ る  
 わ が 影 月 の 影 に な り 暮 ば な 咲 く 道  
 傘 さ し て か ま ど 夏 の 雨 濡 れ た 木 を 焚 い て あ る  
 水 に 杜 の 蔭 が 朝 の 睡 蓮

内 田 南 艸

風 神 竹 千 君 病 歿  
 こ ん な 哀 し い 便 が 來 て 灯 取 蟲 灯 に 入 る  
 死 ん だ 君 の 夢 を み て 桔 梗 が ど う し て も 濃 す ぎ る  
 會 田 保 男 氏 へ

櫻 桃 一 つ く の こ ま や か な 情 い た ど く  
 鯛 鳴 く こ ゝ ら 新 し い 土 の 拓 か れ

サイパン島玉碎

鳥 の し か ば ね あ け くれ な る に 大 瀟 寄 する か  
 大 本 營 發 表 灯 を 消 せ ば 海 に る や う だ

女子を擧ぐ

子 の う ぶ 聲 明 け 易 い 木 の 葉 が ゆ れ る

渡邊砂吐流

朝は柿若葉に透く陽をお櫃へうつしてゐる  
鼓笛隊 先導女子挺身隊入所朝日青葉

菅公生誕千百年獻詠

ゆかりの梅の静かに葉うら實となつてゐる  
驛員防空態勢、着いては發車する度のつじが眞赤  
銃後は夕べ植付終へた影映りゆく  
ことし空梅雨のことなども征く挨拶にしてゐる  
パスが前庭一めん南瓜の花を見せてゐる廳舎前を満員

細谷 不句

葱苗買うて來三畝に植ゑ剥り  
手套にぎりて來や汗ばみ一人の兵隊  
われら家にかへるからだ黒いとんほ低うとぶ  
隣人の畑のものもの繁茂われらトマトを作り  
袖口きつちり結んだ人それへ置くまだうれない茶菓  
風一方より吹き小さい卷蕨草中  
杉の木松の木みなますぐ木の中夏日

安齋櫻碗子

草のいろにまぎればつたは飛ぶまで居る  
ひるがほ咲くわれらが空の備へ青ぞら  
みどりの樹皆動いて居る勝たずばやまず  
草を刈り機を織り征き残れるがごとし  
人々必勝のくらし梅を生らせて立つ梅の木  
一束かついで行く蒲草に笠にふる雨  
空 既に 秋 粟の 青 穂の 空

櫻宮 寒骨

麥刈り終つた學徒に交り顔洗ふ水  
坂上りきつたところ朴の廣葉かげ咲く花  
桑の實をつむむ向ふの畑にする人聲  
朴の木花咲きし大本營發表がありし  
山小屋山々美しい窓駒鳥ないて居る  
山の頂夜あけそめ草青く見えて風あり  
ときどきばつたの羽音する草高い土手

杉山 田庭

皺腹を撫でて半日生き延びる土用風寒し(病中)  
土用風寒し我が鬨魂燃え足らぬものあるか  
土用風が日中南瓜の花に動き止まず  
サイパン 怨敵跳梁 土用風寒し  
旬に櫻咲き遅れと詠み君が心境更にあわたし(露江君へ)  
落ちつかぬ家庭が厭なのではなかつたと私は思ふ(悼富彦君)  
西宮へ移つて挨拶に來た君だつた血壓など笑つてた君だつた(藻川君)

伊東 俊二

暑さいふ暇もない親と暑くても睡つてゐる子と  
皇國の男の子と誰にもいはれてはだか夏  
釘一本探してきて打つて簾をかけた風  
青葉がどこも青いのを集團疎開その子達も  
公園の木々が日暮れる皆白いシヤツ  
清瀨病院を訪ねて  
門から幾筋か草の道君達の室へはこの道  
ここにも南瓜のつるに南瓜の花君は病人

## 妹尾 美雄

馬上に山を見る穂の立つ麥を見る好日  
 五加の芽あますなく採りし人と頌つに  
 しどきといふを一束を握り山の道を下る  
 山鳥のなくを聞きしとてそれを云ふ男夕ぐれ  
 木々青葉觀音様は燭の向ふに  
 どろんこをするから水鐵砲するから街に育ちて

ヒ總統に寄す

今勝機が來る苛烈にして青葉が深く

## 奥村 四絃人

雲ゆきちよと見て青葉に朝のゲートルを巻く  
 ひでりさうの意志むねに植多事務所から日のなか  
 學徒汗に荷車ひいて腕章日にかがやか  
 貯藏食糧あれこれと諸の蔓かろく浮かせる  
 たまの雨は野良人に笑聲湧かし草取り進む  
 南瓜すなほに繩を來る本花二三見せて  
 遠山なみに雲脚速く南瓜釣り終り

## 秋山 秋紅蓼

深夜あきらかに敵と看る月冷嚴たり  
 富士ぞ眞夜となる月あかし雲一片なし  
 身一つをささげ青天のもと汗ふく  
 架線して炎天の兵隊何か聞きとつてゐる汗  
 胡瓜花つけて朝となつてゐる子供のこゑ  
 青梅ごろの峽に入り水おとに倚る  
 實梅おとす家のうら山が富士である

## 萩原 井泉水

暮れおちたらば、道のもくげ少しつまる日暮れずに戻り  
 南京豆たべのこしたのを蒔いたのが生えてきたのを間引く  
 南瓜の花の雄花を雌花に飛ぶ蝶がヒラヒラ通る  
 胡瓜ばたけかはききつてゐる子どもひもじく海から歸り  
 ひまはたくましくて花トマトはなよなよしくて花、に水をやり  
 雨が旱を打つて來てうちの一坪ばたけたうきび

×

うまれた日は今年も曇り南天の花うす日のさし

## 中塚 一碧樓

息子戦線へ出發青い簾を吊るす  
 暇の松林一日が暮れる夏の太陽  
 山毛櫟材の話この男汗ばみて語しやめない  
 母に遠きおもふこの日夕餉の冷し汁  
 少女が國を愛する一ぱいのこゝろ夏の夜灯り  
 草いきれ女人ゆたかなる乳房を捨てり  
 紫蘇の葉を摘み家深くはいりゆきし人

## 西垣 出禪子

麥は刈るべし御山の峽の夜をもかけ  
 海は遠くて峽の山近くにここは早苗晴  
 坊さん朝の徴用工で寺裏の家間をぬける  
 寺の人この月夜の金龜子を掌に打てり  
 夜は皆かき綴る南方へ母はお守を添えたり  
 大和一致きのふけふのわが家根の上を飛びていく機  
 朝澄む地いつぱいの露はこべら露おいた

編輯後記

○創刊號の反響に一言述べます。反響には「手ぬるい」かう云ふのが澤山ありました。此言葉は種々の意味を包むでせう。ある意味で同感とも云へますが、新俳句人が一雜誌に依つたと云ふ事は手ぬるいさわざではないとも亦云へませう。問題は、今後諸氏が如何に結束し、この國民緊張の時局にかせられた使命を達成するかにあると思ひます。この事に就いては日本出版會より特に内意があり、我々も一路猛進を誓ひました。兎に角本誌はこれからでありますから、創刊號で申し上げました様に一にも二にも黨派意識をかなぐり捨てて頂きたいのであります。それに依つて、誌上にその實が現はれて行く事をかたく信じてをります。○次に、本社の社友清規が掲載されてゐない事に就いて質問がありました。社友清規は特に掲載をひかへたのでありまして、それは、入會するとかせぬとか云ふ意味のもとに「俳句日本」の存在意義がある譯でないからで、新俳句人は

現在作句してゐる者、ゐない者全部が本社の社友と思ひたいからであります。尙、今迄の俳句運動は、一つの作品見本を示して、それに一律的に作句せしめんとする運動の様でありましたが、俳句日本は、俳句を作ることが人を作る修業である。さういふことを理想としてゐますし、たとへ個人を強調致しましても昔風の個人の解釋に立つものではありせんから、一人一黨の悪風に墮せない眞に日本の俳句道を思ふ人達の機關誌こそ理想なのであります。役不足の爲に作品を送らないなど云ふ様な人はないやうにして頂きたい。○私達は確乎たる信念的思想を持ち、その句作實踐がこれに責任をもつことが第一でありますから、現状平穩主義による嘘と惰性の中に固定し流されるやうな作品には注意致しませう。諸氏の奮起を願ひ上げます。

風神伸一氏 逝去  
箕輪十三叟氏 逝去  
謹而哀悼申上げます。

投稿略規

- 一、層雲壇 萩原井泉水選
- 宛先、世田谷區松原町一ノ八三 伊東方
- 一、海紅句錄(近作抄共) 中塚一碧樓選
- 宛先、世田谷區上馬町三ノ一〇 五〇
- 一、陸集(陸風集共) 西垣正禪子選
- 宛先、足立區伊興町狭間八八七
- 句數十五句以内、楷書にて清記、居所氏名を詳記のこと。
- 句稿は右三氏のうち一人に宛て直接その住所へ送稿されたいし、一人一ヶ月一稿一選者に限ること。
- 一、×切 毎月十五日
- 一、句稿以外の投稿は本誌發行所宛。但し、當分の間舊各誌の發行社宛に送稿されたいし。陸社は舊「新日本俳句」「多羅葉樹下」「白塔」「北斗」の四社へ。
- 一、購讀誌代の拂込は従前通り舊各誌の發行所宛に願ひます。但し新購讀者に限り必ず「新」と明記して「俳句日本社」へ送金せられたし。

本誌定價

- 一冊分 金七十錢(送料)
- 六冊分 金四圓二十錢(送料)
- 十二冊分 金八圓四十錢(同)
- ・前金(なるべく振替)で御拂込下さい。
- ・必ず何月號よりと御指定の事
- ・御轉居の際は發送部宛御報下さい。

第一卷 第三號

昭和十九年八月廿五日印刷納本  
昭和十九年八月三十日發行

發行人 中塚直三  
編輯人 西垣隆滿  
印刷人 檜山公一  
東京都小石川區諏訪町五六  
印刷所 株式會社 常磐印刷所  
東京一二六

東京都世田谷區松原町一ノ八三  
發行所 俳句日本社  
振替東京一七六〇六四番  
日本出版會 一五〇〇四  
會員番號  
配給元 日本出版配給株式會社  
東京都神田區淡路町二ノ九

戰線及入營の諸氏の投稿に限り軍事郵便はがきにて差支なし

# みいくさ集

藤が實となる面會所兵隊灼の顔です  
 腕章夏の日を呼び鐵屑をあび  
 陽に光る麥穗ゆらく戰ふ國日本  
 翔けるへ共に征きたく雲の果まで帽ふる  
 兵裸か炎天の架橋たけなは  
 又銃線一線あかしやの花こぼれやまぬ地  
 枕べに防空服裝をとゝのへ夏菊かすかにほひ  
 草々の中十薬の勢ひ兵ら小休止  
 敢闘舟と舟とそれへ五月の海のうへ  
 野溝夏の朝たまきはるいのち御民ら  
 艦隊がうごく海にをることろ夏の月あり  
 莞爾として征くか葉ざくら帽をふれ  
 朝暗い月の水をのみ出でて征く  
 海は遠くて船團晴れてくるうぐひす  
 ひとり子空へ飛ばせてその母ひとり麥を刈る  
 天皇の兵ぞけふからは兵ぞ青葉ぞはや  
 富士ぞ静かに月となる來寇入れず

高取芳春  
 伊木祥園  
 田代濱女生  
 渡邊如蘭  
 鳥羽啓人  
 大淵青柴  
 星野武夫  
 蓬萊鶯郎  
 相澤華芳  
 山田宗作  
 南晴星  
 東松八洲雄  
 近木黎々火  
 井上一二  
 柳田流矢  
 秋山秋紅蓼  
 同